アーカイブ新聞　（2015 年 1 月 28 日　第 766 号）

国立天文台・天文情報センター・特別客員研究員　中桐正夫

＊反射望遠鏡の 30㎝主鏡収蔵

国立天文台の前身の一つである東京天文台には、筆者の知る限りでは 30 ㎝反射望遠鏡は 3 台あった。掩蔽観測が各地で行われるため 3 台用意されたと聞いていた。しかし、1953 年 10 月の東京天文台 75 周年記念誌の赤道儀関係には 1 台も記載がない。1968 年 10 月の東京天文台 90 周年記念誌の赤道儀関係には日本光学反射望遠鏡（口径 30 ㎝、合成焦点距離 500 ㎝、1950 年）の 1 台が記載されているのみである。1950 年に購入されていたなら 1953 年の 75 周年記念誌に載っていてもいいと思えるが記載がない。その 3 台は、１）卯酉儀と呼ばれた 30 ㎝反射望遠鏡、２）佐藤英男氏が現在の東京大学天文学教育研究センターの 30 ㎝望遠鏡ドームの赤道儀に載せて、変光星の観測をしていた 30 ㎝反射望遠鏡、３）天文機器資料館に鏡筒のみが残っている望遠鏡である。このように痕跡は存在している。

1) の卯酉儀と呼ばれた望遠鏡は筆者が長い期間観測に使っていたもの（写真 1）で、主鏡・副鏡がついた状態で鏡筒が天文機器資料館に展示されている。
2) は、現在は東京大学天文学教育研究センター内のドームの中に現存している（写真 2）。
3) 無残な姿で光学系がない状態でさかさまに天文機器資料館に展示されている（写真 3）。

写真 1 卯酉儀

写真 2　佐藤望遠鏡

写真 3　鏡筒

現存している 30 ㎝反射望遠鏡の鏡筒で主鏡のないのは３）の鏡筒のみであるから、今回発見された 30 ㎝主鏡は３）の望遠鏡のものと考えるのが相当だが、その出所が納得できない。この 30 ㎝反射望遠鏡主鏡は、木下名誉教授を経由したが光赤外研究部の相馬氏が保管されていたものが譲渡されたのである。掩蔽観測は当時の天体掃索部が担当しており、相馬氏は子午線部の流れをくむ研究者である。

写真 4 が今回発見された 30 ㎝反射望遠鏡の主鏡である。

写真 4　発見された 30 ㎝主鏡

この主鏡の裏面には、製作者の関西光学の刻銘（写真 5）がある。また木箱には「松崎真空被膜株式会社」という真空蒸着の会社名（写真 6）がある。

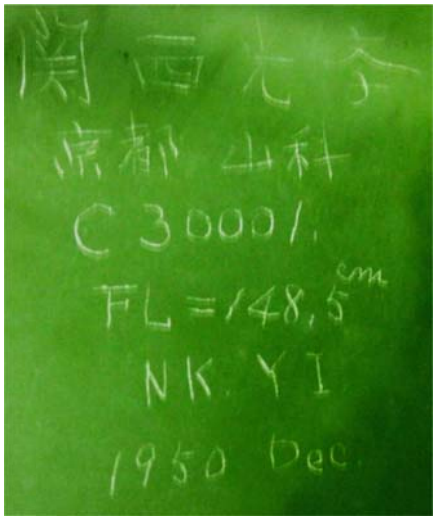

写真 5　刻印

写真 6　蒸着会社名

反射望遠鏡の主鏡は経年変化で反射率が低下すると、再蒸着される。松崎真空は当時蒸着会社としては著名であった。

これらアーカイブ新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp